様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０３１８７

研究課題名（和文）第二次世界大戦期、空爆標的地図にみる米英連合国の空爆戦略の転換

研究課題名（英文）Transformation of the Allied Bombing Strategy on the Target Maps

研究代表者
高田　馨里（TAKADA, Kaori）

大妻女子大学・比較文化学部・教授

研究者番号：４０４３８１７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の課題は、第二次世界大戦における米軍の爆撃戦略の変化―「精密爆撃」から「絨毯爆撃」―を、当時作成された爆撃標的地図を系譜的に分析することによって明らかにすることである。すでにヨーロッパで空爆作戦を展開していたイギリスとの協力のもとで、アメリカ軍は「精密爆撃」地図を作成した。1943年後半における作戦で甚大な人的損失に直面すると、アメリカ軍の空爆作戦も修正を余儀なくされることになった。その戦略の大きな転換は、1944年から1945年にかけて作成されたアジア・太平洋戦線において作成された爆撃標的地図に顕著に表れることになった。1945年を通じて米軍は総力を挙げて日本を地図化し、標的とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、ヨーロッパとアジア・太平洋戦線において米軍が行った空爆作戦を比較するのみならず系譜的に分析することで空爆戦略の転換をとらえるものである。また本研究の最大の特徴は、当時作成された爆撃標的地図を時系列に、作成した媒体やその爆撃標的の在り方を考察することである。従来、爆撃後の写真分析が行われてきた研究にたいして、爆撃前の地図がどのようなものであったのか、標的の描かれかたを提示できた。2018年度に「空襲・戦災を記録する全国連絡会議」に参加させていただいたが、空襲の全貌については日本全国各地で引き続き調査が行われており、海外所蔵の地図資料の有用性を示すことができたと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to clarify the transformation of the US military bombing strategy in World War II-from "precision bombing" to "carpet bombing" based on the genealogical analysis of the bombing target map created at that time. The mapping was done in cooperation with the U.S. and British armed forces, the latter was already engaged in a fierce airstrike operation in Europe with target maps for "precision bombing". However, when the operation in the latter half of 1943 caused tremendous human damage, the US military's strategy was also revised, and a conversion to regional bombing was seen from 1944 to 1945. The shift was particularly marked in the creation of bombing target maps for the Asia-Pacific front. Since the beginning of 1945, the United States Armed Forces has made every effort to map Japan.

研究分野：歴史学

キーワード：第二次世界大戦　爆撃標的地図　ヨーロッパ戦線　アジア・太平洋戦線　戦略爆撃

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

本研究は、応募者が受けた科学研究費基盤研究（C）課題番号 26370870「第二次世界大戦期、米英両国の世界地理認識の比較研究―地図史研究の方法論を用いて（2014-2016）」において調査した文献ならびに米英両国の国立公文書館等での調査で見出した地図から直接的に着想を得たものである。2014 年に訪問したアメリカ合衆国国立公文書館地図室に所蔵されている第二次世界大戦期の地図について、とくに空爆地図に関しては、ヨーロッパ戦線に関するものが非常に少なく、むしろアジア・太平洋戦線に関する地図が多く所蔵されていた。**右地図上**は、アメリカ公文書館で調査した東京下町地域を標的とする地図であり、1945 年 1 月に作成されたものである。そこで、翌年に調査した英国図書館地図室で、こうしたシンプルな地図とは異なる地図を見いだした。それが、**右地図下**の「斜角遠近法標的地図」であった。図書館での調査後、英国立公文書館に移動し、地図作成について記した英航空省の史料を発見した。この地図は、イギリスの空爆用地図を基本に、アメリカ陸軍航空隊の将校がデザインして米英連合国がイギリスで協力して作成したことが分かった。この地図は、ヨーロッパ戦線においてアメリカ軍が目指した「精密爆撃」用に作成された、標的上空侵入路誘導の補助的地図であった。精密誘導爆撃のためのこの「斜角遠近法標的地図」は、米英両国の公史において簡略に述べられているにすぎず、どのような議論を経て、「斜角遠近法標的地図」が作成されたのか、またこの地図がどのように用いられたのか、さらにはアジア・太平洋戦線ではなぜ作成されることはなかったのか、こうした疑問は解決されないまま、課題として残った。本研究は、その課題に取り組んだものである。

２．研究の目的

本研究は、地図史研究の方法論を用いて、第二次世界大戦期に米英連合国による空爆のための地図作成、実際の空爆戦略、そして空爆評価という一連のプロセスを研究することを目的とした。ヨーロッパ戦線において、当初アメリカ軍が目指していたはずの「精密爆撃」が、何時、どのように「地域爆撃」、「絨毯爆撃」へと転換したのか、またこの転換過程において標的とされた都市や地域はどのように決定され、地図化されたのか、空爆作戦の損害がどのように評価されたのかを明らかにすることが本研究の最初の課題であった。さらに、アメリカ軍がヨーロッパで手内下空爆戦略が、アメリカの銃後の国民に対してどのように提示され、理解が促されたのかを検証するものであった。そこで設定した課題は、以下の 3 点であった。第一は、ヨーロッパ戦線における空爆作戦への参加のためイギリスに派遣された第八空軍が、どのような議論を経て、「斜角遠近法標的地図」の作成に至ったのか、ワシントンでの議論と派遣軍における議論を調査し、また米英両国の地図作成プロセスについて調査することであった。第二は、ヨーロッパ戦線における地図作成を含む空爆作戦準備、実際の空爆戦略、そして空爆評価という一連のプロセスを調査し、どのように「精密爆撃」方針から「地域爆撃」へと転換したのかを、米英それぞれの政策決定過程とそれに基づく米英連合国協議について調査することであった。第三に、これまでの研究調査を踏まえ、「精密爆撃」から「地域爆撃」へと転換を遂げる空爆作戦が、対日空爆作戦にどのように適用されたのかを明らかにすることであった。

３．研究の方法

本研究は、海外での史料・地図史料調査と文献調査を行うことで研究を進めてきた。2017 度は、アメリカ合衆国の国立公文書館ならびに連邦議会図書館で調査を行った。イギリスで作成された「斜角遠近法爆撃標的地図」が、アメリカ陸軍航空軍の戦略爆撃調査報告書に組み込まれていることを見出した。報告書は、爆撃の効果、破壊した建造物や軍需産業を分析するものであったが、1943 年を通じて米軍がヨーロッパで展開した空爆作戦に関しては、むしろ米爆撃部隊の人的損失が大きかった。そのためアメリカ政府・軍当局は国民に向けた広報活動を展開する。その広報活動に関しては、当時出版された新聞・雑誌などの調査ならびに作成された映画などの視

覚資料を調査した。これによって銃後のアメリカ国民に示された「精密爆撃」イメージの作られる様子を考察することができた。これら初年度の研究成果は、以下の研究成果（１）にまとめた。2018 年度は、ヨーロッパからアジア・太平洋戦線への移行期における地図作成に関して、イギリスでの調査を中心に行った。とくに、日本に占領されていた東南アジア・南アジア・太平洋・日本の爆撃標的地図作成がどのように行われたのかについて調査を行った。社会への発信として、これまでに調査した成果を、「空襲・戦災を記録する会全国連絡会議（愛媛大学）」で報告し、日本の空襲について調査されている研究者や調査に従事している人々と重要な意見交換を行った。最終年度は、これまでの調査結果や意見交換に基づいて研究をまとめた。海外での調査は、対日爆撃戦略に際した米英両国の地図作成体制に関するイギリス側の協力を明らかにするためにイギリスでの調査を行った。これら一連の調査で収集した地図を系譜的に調査し、米軍の空爆戦略の「精密爆撃」から「地域爆撃」への転換過程を明らかにした。この調査結果は業績（２）としてまとめた。米英両国での系譜的な爆撃標的地図の調査ならびにその作成過程に関する史料調査によって、本研究の当初の目的を達成することができたと考える。

４．研究成果

（１）**「プロエスティ・レーゲンスブルク・シュヴァインフルト―米軍白昼精密爆撃戦略の揺らぎ、1943 年ヨーロッパ戦線―」**『大妻比較文化』所収（2018 年 3 月）、17-43 頁。

この論文では、「斜角遠近法地図」の作成後、この地図がどのように米軍の爆撃作戦で用いられたのかを明らかにした。アメリカ軍は、イギリス空軍指導部の要請にもかかわらず、第八空軍は白昼精密爆撃戦略を採用し、ドイツ占領下のフランスやオランダなどの軍需産業や航空施設への空爆を開始した。この初期の空爆作戦の成功は、新しい航空戦争計画に影響した。この計画では、爆撃機部隊に随行する戦闘機部隊は軽視され、爆撃部隊は機銃による自衛が求められた。白昼精密爆撃作戦に対するイギリス側の懸念や批判に対して、第八空軍は、白昼精密爆撃作戦用の地図を開発した。それが、「斜角遠近法地図」であった。イギリスの標的地図を参照としながらも、爆撃部隊の攻撃目標への侵入経路を追加した地図（**前頁右地図下**）は、第八空軍の白昼精密爆撃戦略への意思を示すものであった。実際に、この地図をもって、第八空軍は、1943 年初頭より「ポイントブランク作戦」を開始する。米軍の精密爆撃はしかし、精密には程遠く、ドイツ占領下のフランス、オランダ、ベルギーでは民間施設（病院や小学校）への誤爆によって多数の市民が死傷し、米軍に各国政府から抗議が寄せられていた。1943 年 8 月、米軍単独で行われたプロエスティ、レーゲンスブルク、シュヴァインフルト空爆作戦は、「斜角遠近法地図」を用いた精密爆撃を行うものであったが、しかし戦闘機による護衛なき爆撃機が撃墜さるか被弾し、さらに航空隊員の多くの死傷者を出した。この作戦以後、米軍の空爆戦略はレーダー誘導などを用いる作戦へと転換を余儀なくされることになった。しかし、米国内では空爆作戦に出動する爆撃機が精密爆撃を成功させるという空爆イメージを描き出した映画『メンフィス・ベル』が公開され、実態とは異なる空爆イメージの普及が図られることになったのである。

（２）**「『日本地図化』の総力戦―第二次世界大戦期、米軍の対日爆撃標的地図作成―」**『大妻比較文化』所収（2020 年 3 月）、67-90 頁。

この論文は、ヨーロッパ戦線からアジア・太平洋戦線へと空爆作戦の重点が移動する中で、米英連合国がどのように日本を地図化したのかについて考察したものである。ヨーロッパ戦線でイギリスと連携したのとは異なり、アジア方面に関しては、圧倒的に情報が不足していた。そのため米軍は、オランダやフランスなどの植民地地図をイギリスから供与されて地図を作成した。戦略調査局も戦前に得た日本地図を利用して、テーマ別の日本地図を作成した。しかし、ヨーロッパで行われていた航空諜報が、アジア・太平洋戦線では実行困難ななかで、日本の地理情報、とくに標的とるだろう軍需産業や飛行場、航空機生産工場などの情報は不足していた。

ミッドウェー開戦後、米陸海軍司令部は、いくつもの戦域に分かれたアジア・太平洋地域における諜報の効率化の必要性を認め、新たに統合諜報研究委員会 JANIS を設置した。マリアナ諸島サイパン、テニアン、グアムの陥落は、地図作成において大きな変化をもたらした。サイパンを拠点に日本本土を網羅する航空諜報が可能になったのである。当初、海軍空母艦載機で行われていた航空諜報活動に、陸軍航空隊に B-29 の偵察機版 F-13 が配備され、大量の写真を撮影した。こうして、対日爆撃標的地図（**前頁右地図上**）が、米陸・海軍の協力によって作成された。

対日航空諜報活動が進展し、1944 年末から 1945 年にかけて、第 20 空軍による空爆作戦が開始された。最初に空爆の対象都市とされたのは、東京、横浜、川崎、名古屋、大阪、神戸である。1945 年 1 月、カーチス・ルメイが爆撃作戦の指揮を執ることになり、日本の都市への地域爆撃が行われるようになったが、これは、ヨーロッパ戦線における白昼精密爆撃からの逸脱や断絶ではなく、1945 年 2 月のドレスデン空爆など一連のドイツの都市への地域爆撃と連続して行われたものであった。第二次世界大戦における航空諜報による地図作成は、米英連合国の協力のみならず、それまで競合的だった米陸海軍ならびに陸軍航空隊の間の協力関係の下で遂行された対日総力戦としての「日本地図化」であった。これにより日本は焦土を化した。そして、広島、長崎には原爆が投下されるが、この二つの都市もまた地図化された都市だったのである 。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 高田馨里	４．巻 21
２．論文標題 「日本地図化」の総力戦―第二次世界大戦期、米軍の対日爆撃標的地図作成―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 大妻比較文化	６．最初と最後の頁 67-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高田　馨里	４．巻 19
２．論文標題 プロエスティ・レーゲンスブルク・シュヴァインフルト―米軍白昼精密爆撃戦略の揺らぎ、1943年ヨーロッパ戦線―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 大妻比較文化	６．最初と最後の頁 17－43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 高田馨里
２．発表標題 大戦期米英爆撃標的地図の調査について―米英地図の関連性
３．学会等名 第19回米軍史料の調査・活用に関する研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 高田馨里
２．発表標題 第二次世界大戦における米英爆撃標的地図の変容
３．学会等名 第48回空襲・戦災を記録する会全国連絡会議
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考